課題　「悲しみ」

「ライト！」

人物

北村　美悠（15）高校生　演劇部　役者
神道　楓（15）高校生　演劇部　照明係
岩崎　翼（17）高校生　演劇部　役者
三上　康太（17）高校生　演劇部　照明係
石田　彩夏（17）高校生　演劇部　役者
藤崎　健斗（17）高校生　演劇部　役者

○体育館　外観（夕暮れ）
体育館には暗幕が貼ってあり、その隙間から光が漏れている。

○同　壇上の上
舞台には、仮で建てられている大道具がある。
上手から、仮衣装姿の北村美悠（15）と岩崎翼（17）が入ってきて、スポットライトがあたる。

岩崎「あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どういうことです？」
美悠「我が人生の喪服なの。私、不幸せな女ですもの：」
岩崎「なぜです？わからないなあ・・」
突然、ガシャンと客席側から音がして、美悠に当たっていたスポットライトがずれる。
咄嗟に、スポットライトの方向をみる美悠。

スポットライトの横で、倒れている女子がみえる。

岩崎「（小声で）美悠ちゃん、ちゃんと演技して」

美悠「‥はーい」

美悠、仕方ないという表情で演技にもどる。

○同　客席側、後ろのキャットウォーク

スポットライトの横に座り込み、お尻をさすっている、神道楓（15）

その下で、心配そうに見ている、三上康太（17）

三上「神道さん、大丈夫？」

楓「あ、すいません。大丈夫です」

楓、精いっぱいの笑顔で返す。

○歩道（夜）

制服姿で、帰り支度の楓と美悠が歩きながら話している。

美悠「ったく、むかつく」
楓「でも、本番でそれやったらダメなんだし。
　そのための稽古だから」
美悠「だからこそでしょ。本番じゃないんだか
　ら、何かあったら止めるべき。部長なんだし。
　演技指導も演出より細かくてさ」
楓「あいかわらず、美悠ってきつーい」
美悠「だってあいつ、２人でいる時は美悠ちー
　ゃんって呼ぶんだよ。ほんときもい」
楓「え？そうなの？」
美悠「おかげでさ、演技でなくても嫌いだから、
　演技するの楽でさ」
楓「・・・そっかー。そういうものなのか・・」
　　楓、妙に納得している。
美悠「ちょ、変なこと考えてない？」
楓「え？」
美悠「言っとくけど、藤崎先輩は好きじゃない
　からね」
楓「え。だってあんなに好き好きいって・・」
美悠「演技にきまってるでしょ！」

楓「なあんだ、よかったー」
美悠「なんでそう思うの」
楓「へへへ」
美悠「・・あれ？ってことは」
楓「だってさ、先輩かっこいいじゃん。お芝居もうまいし」
美悠「あれが？楓ってお子様だなー」
楓「ひどーい。じゃ、美悠ちんはどの人が好き？」
美悠「え？」
楓「カッコいい人がだめなら、どんな人がいいの？」
美悠「どんな人って…いないよ、そんな人」
楓「えーもったいない、美悠ちんかわいいのに」
美悠、曖昧に笑いながら、くったくなく話す楓をみる。

○体育館　外観
「演劇部32回公演『かもめ』」と書かれた看板があり、入り口横で受付が始まっている。

○同　舞台裏

衣装をきたキャスト達と、裏方の人たちが集まっている。

楓は、スタッフ用の黒の「シャツをきており、隣には、同じく黒の「シャツを着ている三上がいる。

仲良さげに、三上と楓は話をしており、その姿をみる美悠。

美悠に気が付いた楓が、美悠に『がんばって』のポーズを送る。

演出兼、顧問らしき先生の横に岩崎は立っている。

岩崎、一歩前にでて話し出す。

岩崎「やっと今日をむかえる事ができました。僕は役者で演出ではありません。でも部長として演技のことを細かく指導してきました。少し窮屈だった人もいたかもですが、みんなこの半年間、よくついてきてくれたと思ってます。今日は、精いっぱい楽しんで、お芝居を盛り上げていきましょう」

岩崎と目が合った美悠、思わず視線を外す。

○同　舞台袖

開演のブザーが鳴る。

上手で待機している美悠と岩崎。

美悠の手先は、少し震えている。

岩崎「美悠ちゃーん」

美悠「…あ、はい」

岩崎「あのさ、芝居おわったら、プリンパフェ食べに行かない？」

美悠「はあ？」

岩崎「リトルマーメイドのパフェ好きでさ。2人で食べに行こ」

美悠「私が？部長とですか？」

岩崎「うん。美悠ちゃんの顔みながら食べたい」

美悠「…（凄く嫌という顔をして）」

岩崎「あ、ほら出番」

客席の照明が暗くなり、岩崎、美悠の手をとって、舞台に歩き出す。

○同　舞台

岩崎の手をふりはらいながら、登場する、美悠。

美悠の迫真の演技に合わせて、スポットライトが動く。

○同　客席後ろのキャットウォーク

真剣に、スポットライトを操作している楓。

楓「（独り言）やっぱり、美悠はすごいな‥」

○同　舞台

石田彩夏（18）と藤崎健斗（18）が舞台にいる。熱延の２人。

彩夏「…わたしは信じているから、そう辛いこともないし、自分の使命を思うと、人生もこわくないわ」

藤崎「君は自分の道を発見して、ちゃんと行く先を知っている…」

客席は静まり返っている。

○同　舞台袖

彩夏の演技を真剣な目でみている美悠。

○同　楽屋

美悠、メイクを落としていると彩夏がやってくる。

彩夏「いい演技だったね、北村さん」

美悠「ほんとですか？！」

彩夏「うん。とっても生き生きしてた」

美悠「石田先輩にいわれると嬉しいです」

彩夏「ありがと。あ、岩崎なにか言ってた？」

美悠「え？」

彩夏「それは気にしなくていいから、私も一緒にいくし」

美悠「一緒にいく？」

彩夏「プリンパフェ。私も好きなの。あと翼と私、付き合ってるから」

美悠「ええ？！」

彩夏「あいつって、ほんっと芝居バカなのよ」

美悠、ぽかんとした顔で彩夏をみる。

○同　照明室

楓と三上が作業をしている。

楓を探してやってきた美悠、声をかけようとするが、三上を見てとっさに隠れる。

楓「あの‥すいませんでした。明日はミスないように」

三上「大丈夫だって。神道さん、あれはミスってほどじゃないから」

楓「でも‥」

三上「照明、希望じゃなかったでしょ？」

楓「え‥」

三上「女の子で、裏方希望するって人あんまりいないから」

楓「あーでも私、演技へただし、かわいくないから無理かなって」

三上「…かわいいよ、神道さんは」

楓「‥え？」

三上「いや‥あの、こんなやりたくもなかった照明係になっちゃってさ、‥ごめんね」

楓「でも私、先輩と一緒に照明出来て、楽しい

です」
三上「ほんとに？」
楓「ほんとです。ライトだけでこんなに種類あるなんて知らなかったし・・」
三上「うん。ありがと」
楓と三上の楽しそうな笑顔をみて、美悠そのままそっと部屋からでていく。

○同　客席
ぼんやり舞台を眺めている美悠。
岩崎がやってくる。
岩崎「美悠ちゃん、明日も頑張ろうね」
美悠、岩崎をじっとみて・・
岩崎「何？」
美悠「・・我が人生の喪服なの。私、不幸せな女だから」
岩崎「（演技をうけて）なぜです？わから」
美悠、涙がでてくる。
岩崎「・・上手くなったね、もう女優だ」
誰もいない舞台をみる、２人。　了